千葉県文化財センター調査報告第327集

佐倉市佐倉城跡

—千葉県立佐倉東高等学校部室建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

平成10年3月

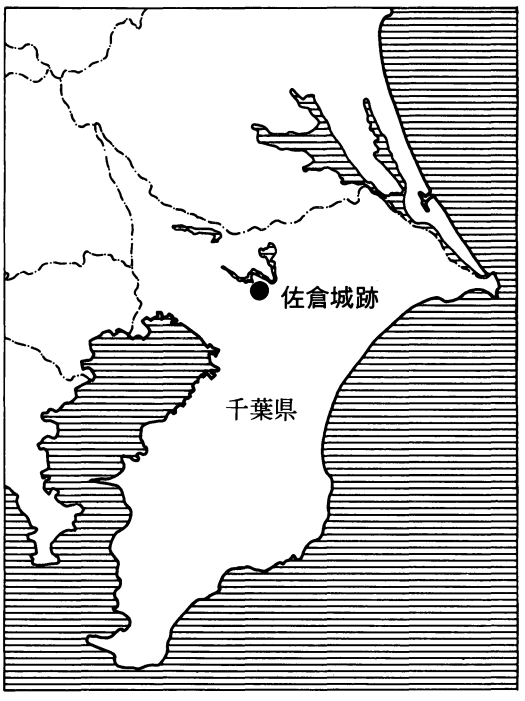
千葉県教育庁管理部

財団法人　千葉県文化財センター

千葉県文化財センター調査報告第327集

佐倉市佐倉城跡

―千葉県立佐倉東高等学校部室建設に伴う埋蔵文化財調査報告書―



平成10年3月

千葉県教育庁管理部

財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第327集として、千葉県立佐倉東高等学校部室改築工事に伴って実施した佐倉市佐倉城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、江戸時代の佐倉藩上級武家の屋敷跡の一部が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が、学術的資料として、また郷土史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係諸機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年３月

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中　村　好　成

凡　例

1　本書は県立佐倉東高等学校部室建設に伴う埋蔵文化財調査報告書である。

2　調査は千葉県教育委員会の指導のもと、千葉県教育庁施設課の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

3　発掘調査は平成9年4月3日から4月21日まで、整理作業は9年4月22日から4月30日まで、所長折原繁の指導のもと、副所長宮 重行が担当した。

4　使用した地形図は国土地理院地形図1/50,000（佐倉）、佐倉市都市計画図1/10,000である。

5　挿図の方位はすべて座標北である。

6　航空写真は京葉測量株式会社平成7年撮影のものを使用した。

7　陶磁器の鑑定では豊島区調査会鈴木裕子氏に教示を得た。

8　調査及び整理作業に際しては佐倉市教育委員会、佐倉市市史編纂室、県立佐倉東高等学校、国立歴史民俗博物館杉山晋作氏、藤尾慎一郎氏、瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏の協力を得た。記して謝意を表する。

目　　次

序文
凡例

本文目次

1　調査に至る経緯…… 1
2　調査方法と経過…… 1
3　遺跡の立地と環境…… 1
4　調査区及び遺構…… 3
5　出土遺物…… 4
6　まとめ……11

挿図目次

第１図　遺跡周辺地形図…… 1
第２図　調査区位置図…… 1
第３図　佐倉城跡古図…… 2
第４図　調査地点…… 2
第５図　調査区及び検出遺構…… 4
第６図　出土磁器…… 5
第７図　出土陶器（１）…… 6
第８図　出土陶器（２）…… 8
第９図　出土土器…… 9
第10図　出土石製品・瓦・土製品・金属製品・銭貨……10

図版目次

図版１　佐倉城跡航空写真
図版２　調査区遠景・遺物出土状況・002号跡全景
図版３　出土磁器・陶器(1)
図版４　出土陶器(2)・出土土器
図版５　出土石製品・土製品・瓦・金属製品・銭貨

表 目 次

表１　出土陶磁器・土器一覧表……12
表２　出土石製品・瓦・土製品・金属製品・銭貨一覧表……13
表３　出土土器類比率グラフ……14
表４　出土土器類器類別比率グラフ……14

1　調査に至る経緯

県立佐倉東高等学校木造部室の老朽化に伴い、かねてから建て替えの要望が各方面からなされていたところであるが、平成７年、創立90周年を期に体育館脇の部室兼体育倉庫の隣接地に、新たに部室を建設する話が具体化した。対象地は佐倉城内域であり、遺構の存在する可能性があったので、事前に県教育庁生涯教育部文化課で試掘調査を行ったところ、遺物及び焼土遺構が認められた。そこで取り扱いについて検討されたが、緊急性が高く、計画の中止及び建設地の変更は不可能であったので、事前の発掘調査を行い記録保存する運びとなり、当センターが県教育庁管理部施設課の委託を受け調査を実施した。

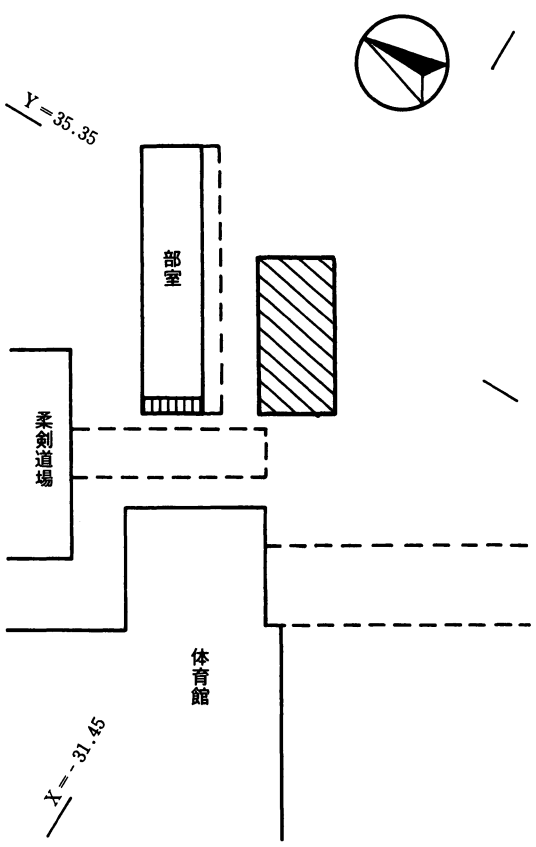
2　調査方法と経過（第２・５図）

調査区は部室用地、短辺５ｍ、長辺10ｍ、面積にして50㎡である。遺構の検出面まで盛土が２ｍ近く堆積していたため、周辺を一回り広く掘り、段を付けて更に掘り下げる階段掘りの方法を採用した。盛土までは基本的に重機を用い土を除去し、以下を人力で掘り下げた。対象地を東西セクションを境に南側を１Ｔ区、北側を２Ｔ区と区切り、１Ｔ区をさらに東側を01、区側を02に２分割した。遺物は遺構に伴うもの及び完形に近いものを除き、各区で層位ごとに一括で取り上げた。

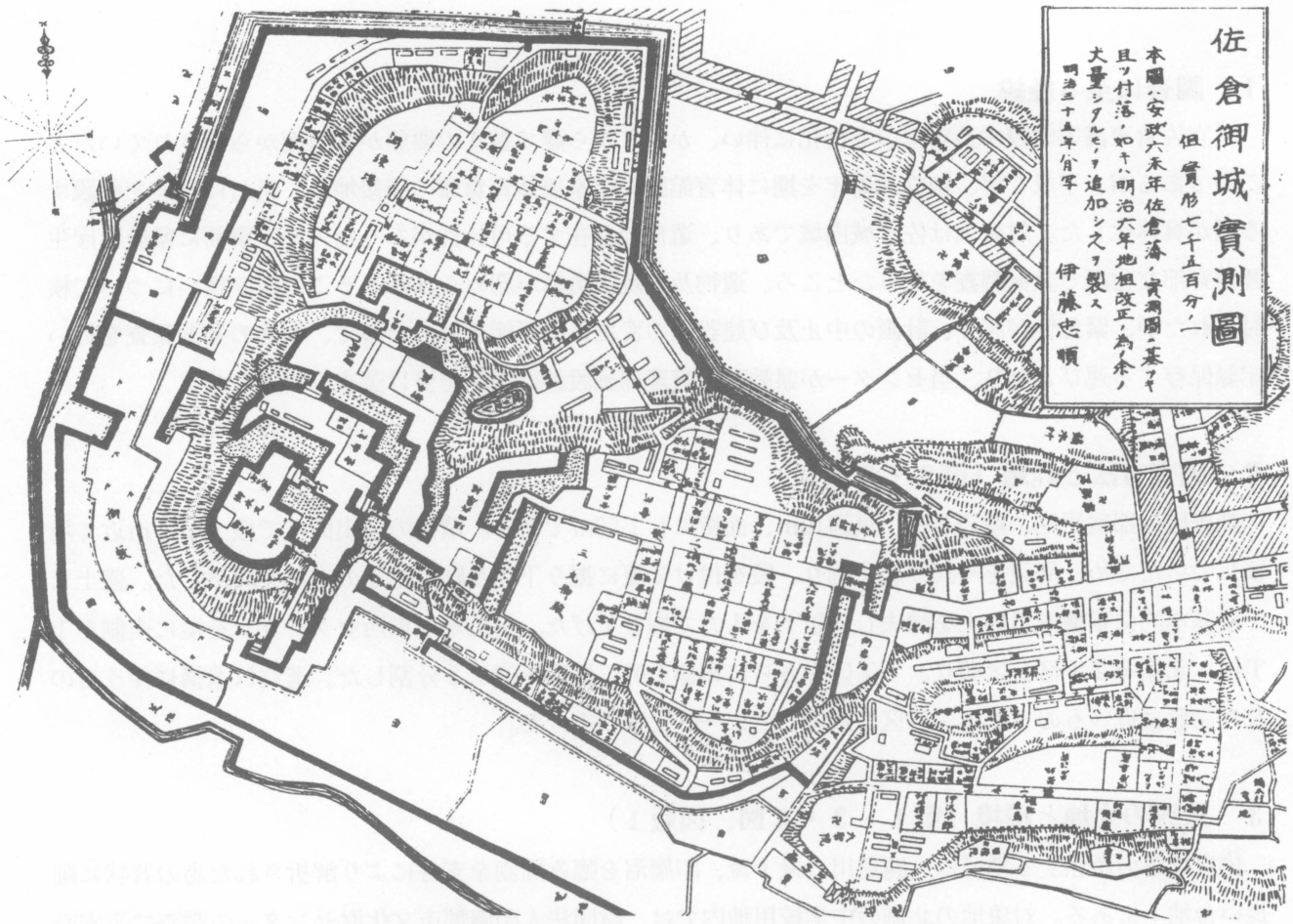
3　遺跡の立地と環境（第１・３・４図、図版１）

佐倉城跡の所在する地域は、鹿島川の最下流、印旛沼を臨み両側を支谷により解析された馬の背状に細長い台地上にある。対象地の北側の中学校用地内では、財団法人印旛郡市文化財センターの調査で平安時

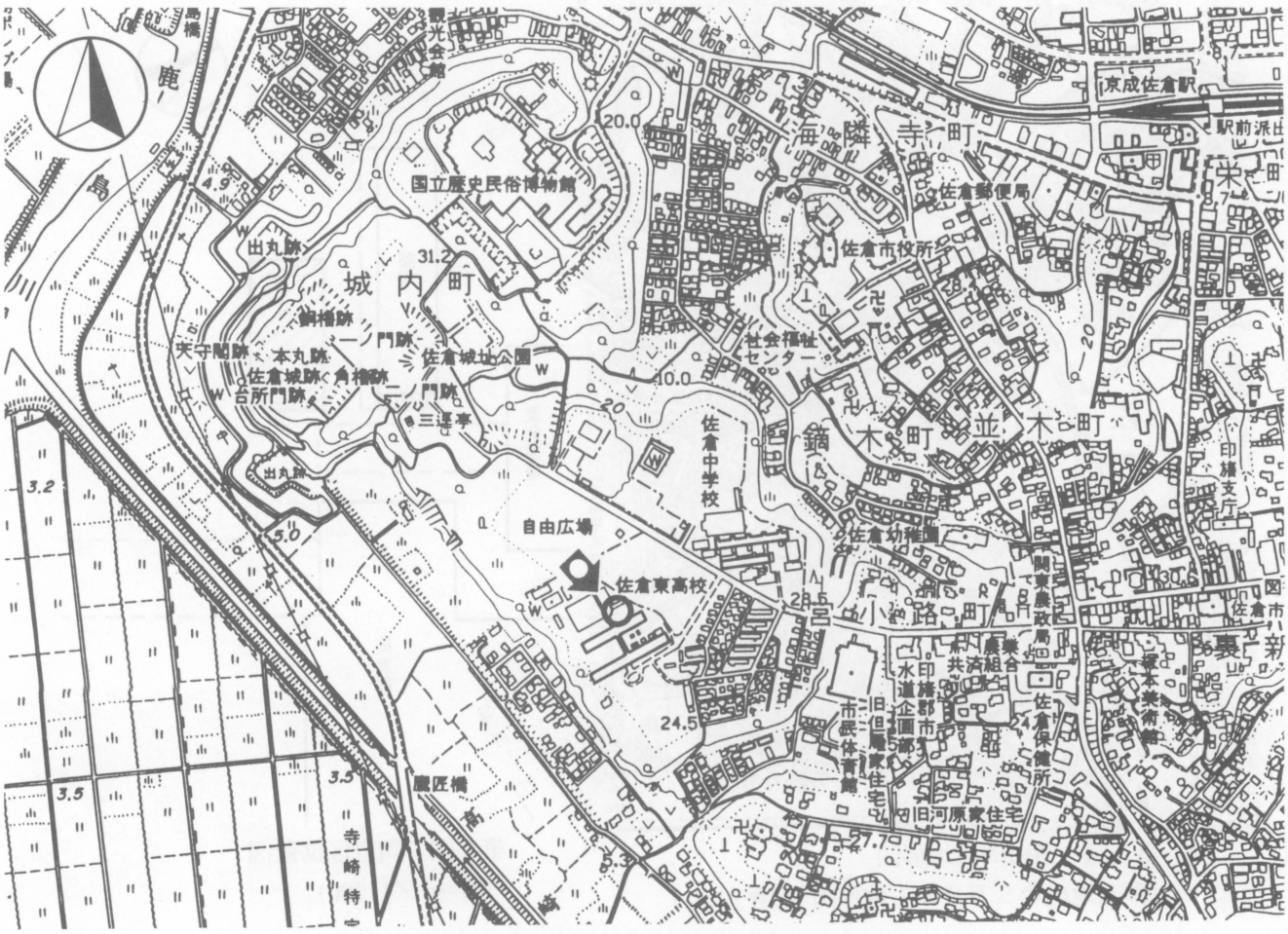
第１図　遺跡周辺地形図
（国土地理院５万分の１地形図「佐倉」より）



第２図　調査区位置図
（Ｓ＝1／1,500）



第３図　佐倉城跡古図（佐倉史談より　Ｓ＝約1／10,000）



第４図　調査地点（佐倉市都市計画図　1／10,000より）

代の遺構が検出されている。今回の調査では古墳時代後期の土師器・須恵器が出土しており、古墳あるいは古墳時代の集落が存在した可能性がある。城館としての利用が開始されたのは中世以降であり、千葉氏一族の出城の鹿島城として出発した。天正末期には一旦本格築城が試みられたが中止されている。家康の関東入部以降は、当初千葉氏の居城だった酒々井の本佐倉城に家臣が配されていたが、土井利勝の代になると家康の命により本格的に築城され、元和3年にはほぼ完成した。以降は代々明治4年廃藩置県になるまで譜代の大名が封された。佐倉が城下町として本格的な発展をみたのは後期堀田氏になり、転封がなくなってからである。

調査区の周辺は江戸時代の古地図によると、上級家臣団の屋敷地にあたる。高校敷地西側の現在自由広場となっている個所には、文政年間に三の丸御殿が建てられた。台地を東西に縦断して宮小路から追手門を通り、本丸へ通じる広小路通りがあり、その両側に屋敷が建っていた。調査地は三の丸御殿手前の十字路からさらに小路で東西に分かれる付近で、広小路町と下町との境近くにあたる。

佐倉城は、軍制改革に伴い明治6年には主に近辺を防備する第一軍管東京鎮台の歩兵第2連隊の駐屯地となる。それまでいた佐倉藩の家臣は移転し、椎木町は兵舎に、三の丸御殿・広小路町周辺は練兵場として造成された。そして第二次大戦後、北半側は佐倉市立佐倉中学校と植物園に、東南側は県立佐倉東高等学校の敷地となった。また、西半部は自由広場としてほぼそのままで残されている。

4　調査区及び遺構

調査区（第5図、図版2）

調査対象面積は、幅5m、長さ10m、面積50m²の範囲である。しかし建物が近接し、かつ電線が埋設されており、それらを避けて調査したため、実際に地山まで調査ができたのは5割程度である。検出遺構は明治初年の面で井戸跡1基、旧表土上部で焼土跡4基、下部で土坑が3基、柱跡2基である。

江戸時代の面の下は黒色土であり、古墳時代土師器・須恵器が出土したが、遺構は検出されなかった。下層は井戸の調査と兼ねて1m×2mを掘り下げたが、遺物が出土しなかったため本調査を行わなかった。

遺構

001号跡（第5図）

西端部で調査区の壁にかかって3分の1が検出された土坑である。径1.7m程度の円形のプランになろうか。近世表土の中位から掘込まれており、深さが0.7mほどある。床面近くから陶磁器の茶碗類が出土しているが、19世紀の瀬戸産もあれば、18世紀の伊万里、唐津碗もあり混在状態である。大形巻貝の貝殻や瓦の出土もあり、ゴミ穴の類と思われる。

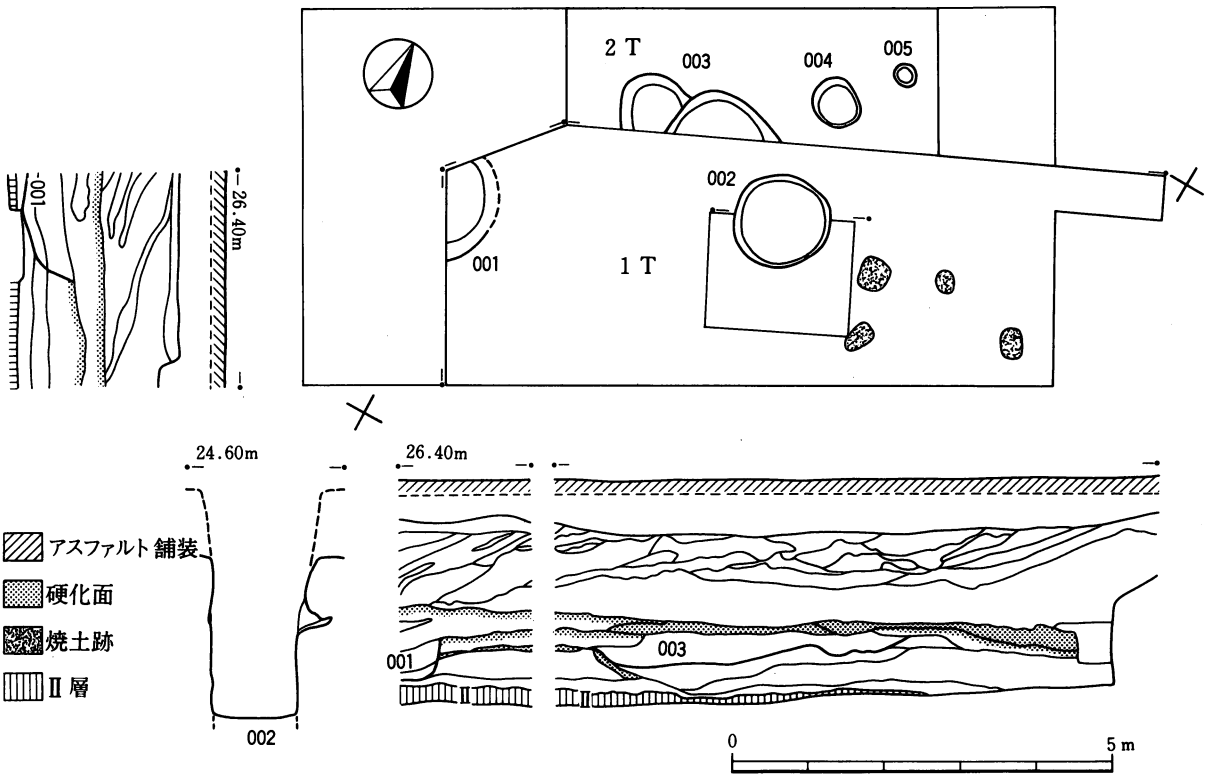
002号跡（第5図、図版2）

調査区中央で盛土下に検出された井戸跡である。盛土下では平面的に確認していないが、南側グリッド壁のセクションから見ると、溝状の落込みがみられるので、井戸からのびる溝があった可能性がある。

検出面での直径は1.4m、II層上面で1.2mで、そこから垂直に落ちている。深さ3m以上は調査不能であった。覆土は盛土と同じ土で、多量の瓦、陶磁器、礫類が投げ込まれた状態で出土した。

003号跡（第5図、図版2）

調査区中央部にセクションにかかって検出された土坑で、サブトレンチがあったため、半分のみが確認



第５図　調査区及び検出遺構

された。長さ1.2mで幅や形は不明で、深さ0.2mほどである。陶磁器類の砕片が出土した。性格は不明である。

００４・００５号跡（第５図）

硬化した覆土をもつ円形の小土坑で、004号跡は径0.7m、深さ0.15m、005号跡は径0.3m、深さ0.1mである。柱等の施設の土台跡であろう。

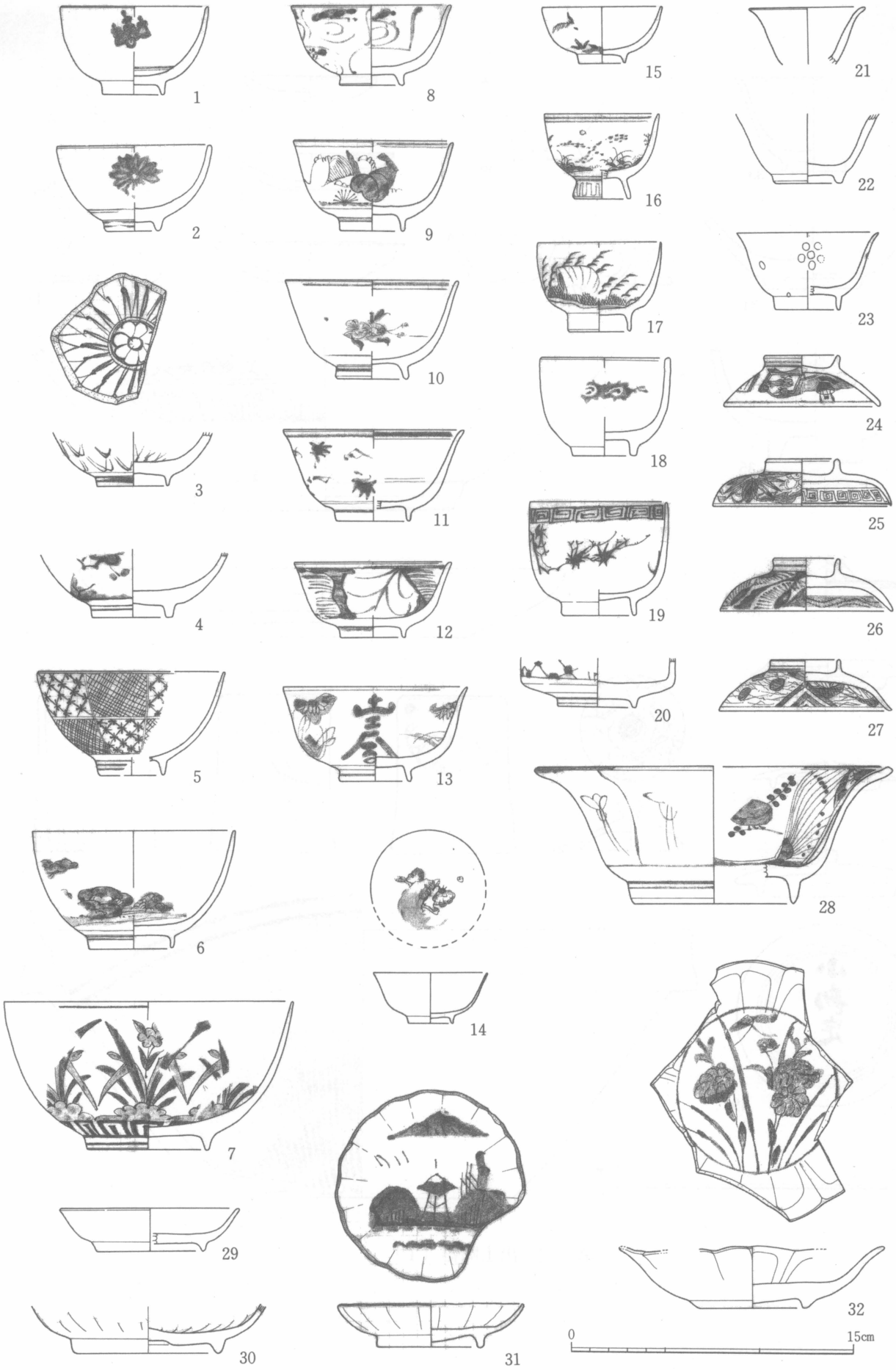
その他

明治初期の表土面を始めとして、範囲は確認できなかったものの複数の硬化面が認められた。硬化面は中央部のセクションでも明瞭にとらえられた。また焼土跡が４個所ほど旧表土中で検出された。

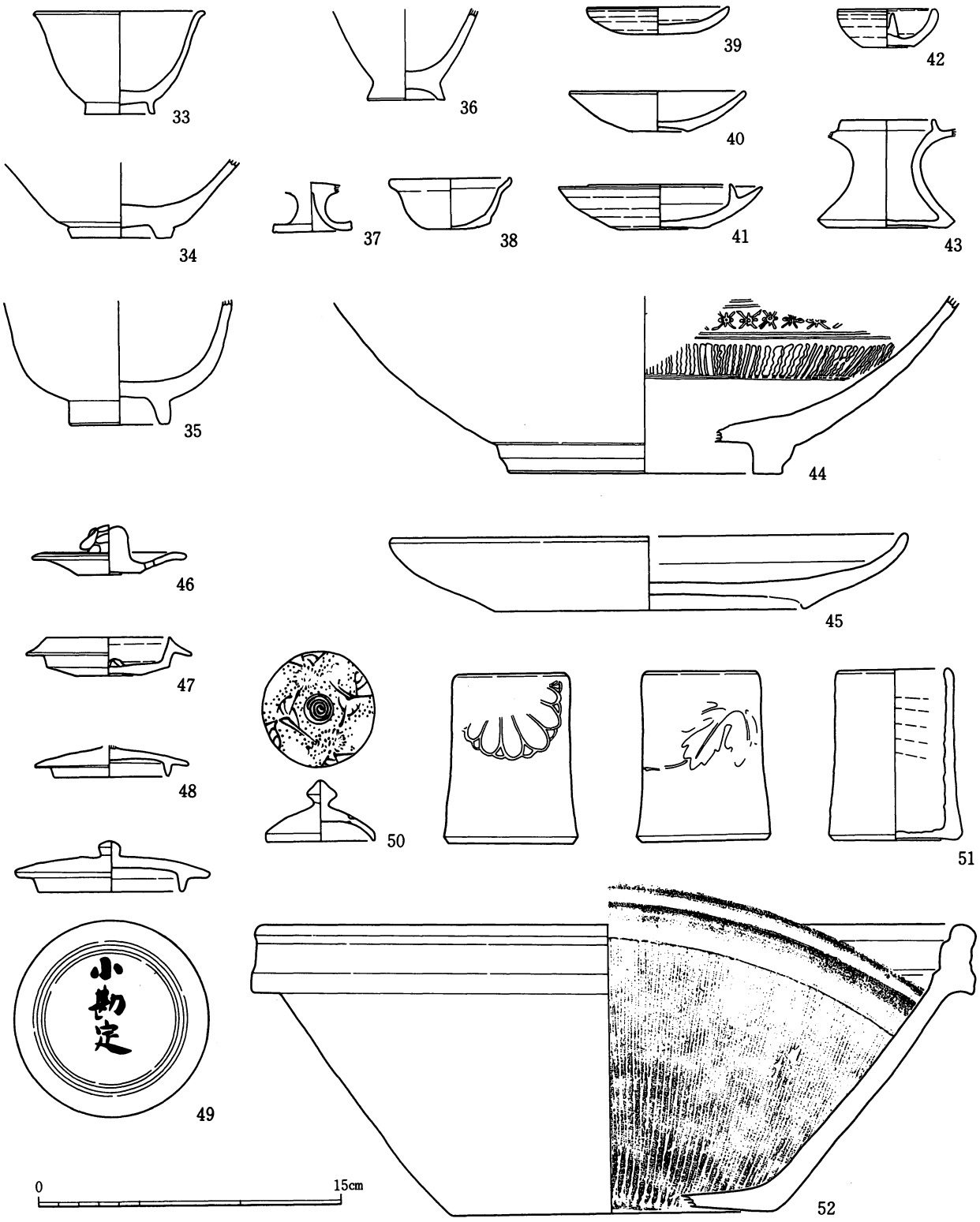
5　出土遺物

ａ磁器（第６図、図版３、表１）

１～７は肥前産の飯茶碗である。７は大振りで鉢ともいえるものである。８～13は端反りの飯茶碗で19世紀瀬戸産である。14～20は湯呑み茶碗である。14は見込みに松に亀の色絵が施されている。20は筒形碗である。21～22は無文の端反り茶碗である。23は端反り茶碗で青磁がかった色調で五星文が押圧されている。24～27は茶碗の蓋である。24は広東碗風の直線的な口縁で、書斎の様子文様が描かれている。25～27が端反りになる。28は六角鉢で焼き継ぎ痕がある。29～32は皿である。29は青磁の小皿、30は青磁の菊花皿でひび割れが激しい。焼継ぎ痕を持ち、裏面に焼継ぎマークがある。31は折縁皿で、32は蓮花皿である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
15cm

第６図　出土磁器



第７図　出土陶器（１）

ｂ陶器（第７・８図、図版３・４、表１）

33は京焼系の小形茶碗である。34・35は肥前系で天目茶碗、35は同じく湯呑み茶碗である。36は卵立形の小碗であり、相馬産かとみられる。39・41は美濃産の鉄錆釉の施された灯明皿で、41は受け付きである。40は信楽系の灯明皿と思われる。42・43は秉燭で42は「タンコロ」形、43は容器付きのものである。38は鉄釉のミニチュア鍋である。44は三島手の鉢である。45は鉄釉・灰釉の皿である。

46～49は土瓶の蓋である。46では紐が獅子をかたどっている。48・49は美濃産の櫛歯文のもので、49では内面に「小勘定」の墨書がある。50は色絵の施された急須の蓋で、空気抜きの穴は貫通していない。51は京焼系の筒形灰吹きでほぼ完形である。52は堺産の焼締め摺鉢である。

53～59は大形の鉢である。53・54は瓶掛型の火鉢である。55～57は手水鉢である。53・57は底面に穿孔され、植木鉢に転用されている。58は植木鉢である。59は浮文を持つ鉢で植木鉢とみられる。

ｃカワラケ・土器（第９図、図版４、表１）

60はススが付着し灯明皿として用いられたカワラケである。61は精製の皿で、内外面ともよく器面が平滑化され、底部内外面に三ツ星の黒斑がある。62は焼塩壷の蓋である。63は瓦質の円筒形火鉢で外面に型押文があり、一部帯状に磨かれている。64は大形でタガを持つ火鉢で、型押文が施されている。胎土は砂質であまり焼成が良くない。65は浅い内耳土鍋で、残った破片から推定して中央部は平らな底になるとみられる。66はカマドの掛け口にのせる台である。67は七輪である。68は皿形で穴があいており、七輪の部品で「さな」とよばれるものある。69は器台形をした火鉢の五徳で、内面上部に切欠きがみられる。七輪の部品では、他に風口部の破片が出土している。

ｄ石製品（第10図、図版５、表２）

70～75は砥石である。70・75は板状、他は柱状を呈している。76・77は砂岩製の鋳型である。76は投網の錘のものである。77は破片で砥石に転用されている。78は片岩製の小形硯でほぼ完形である。81は切断されたメノウ質の石刃片の周囲を打欠いて正方形に成形したものである。使用のためか一側縁の中央部が刃潰しされており、ガンフリントと思われる。82は黒碁石である。

ｅ瓦（第10図、図版５、表２）

多量の本瓦の破片が出土した。79・80は巴文を持つ軒丸瓦である。

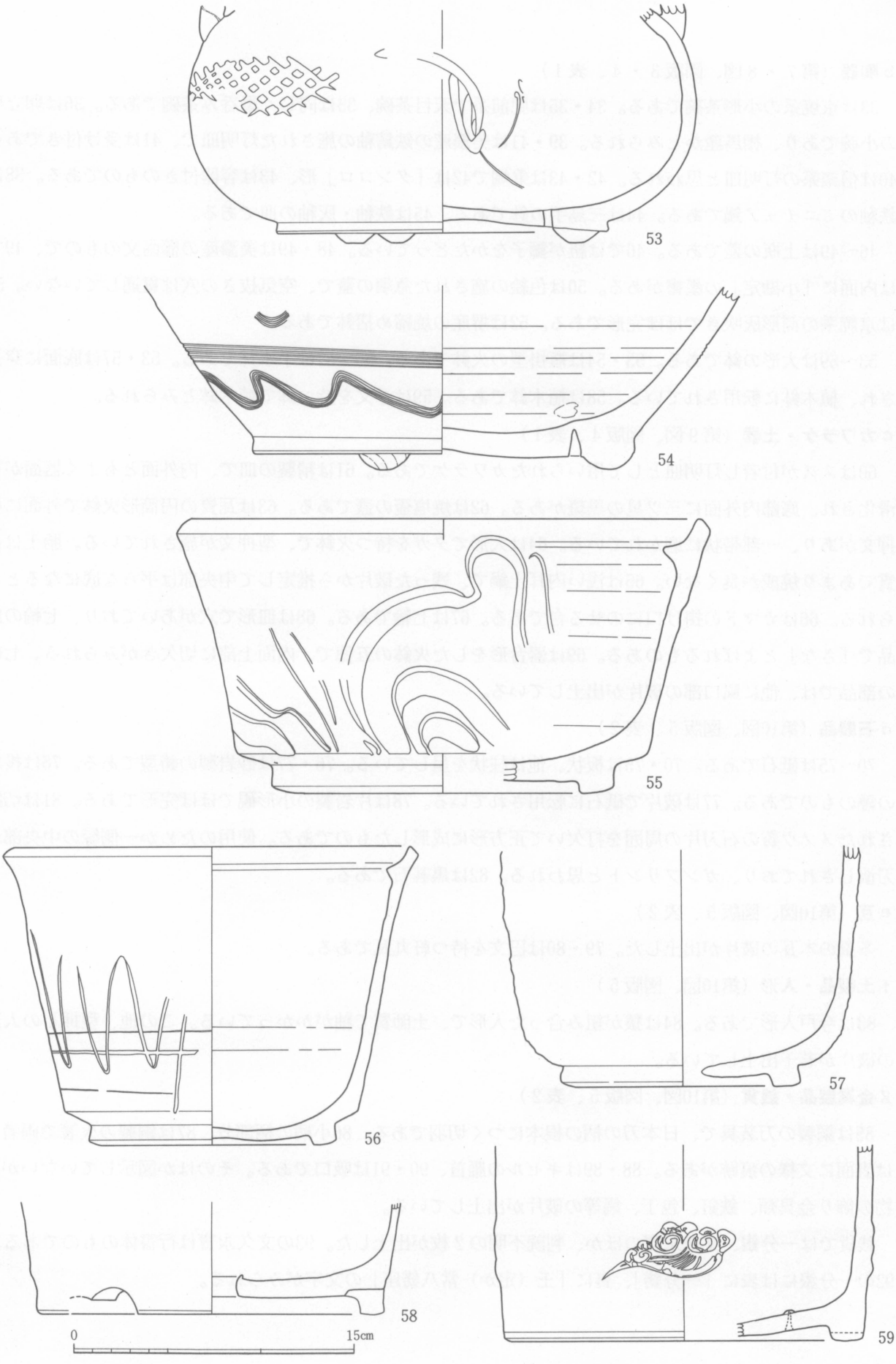
ｆ土製品・人形（第10図、図版５）

83は今戸人形である。84は猿が組み合った人形で、土師質で釉がかかっている。この他、型押しの人形の破片が若干出土している。

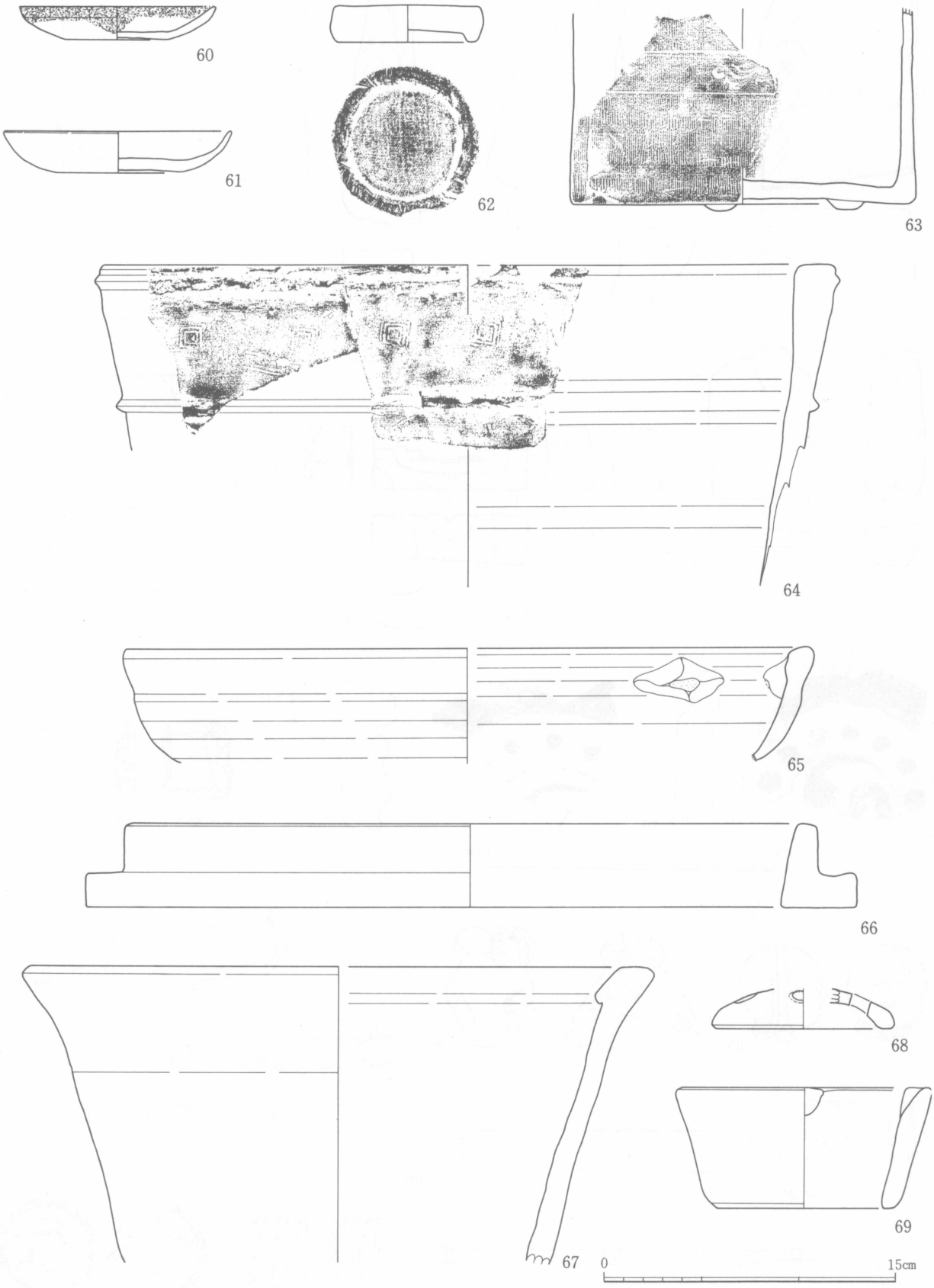
ｇ金属製品・銭貨（第10図、図版５、表２）

85は銅製の刀装具で、日本刀の柄の根本につく切羽である。86小柄の柄部分、87は銅製の火箸で両者には表面に文様の痕跡がある。88・89はキセルの雁首、90・91は吸口である。そのほか図示していないが建物の飾り金具類、鉄釘、包丁、鍋等の破片が出土している。

銭貨では一分銀、文久永寶のほか、判読不明の２枚が出土した。93の文久永寶は行書体のものである。92の一分銀には表に「一分銀」、裏に「王（定か）常八銀座」の文字がみられる。



第８図　出土陶器（２）



第9図　出土土器

第10図　出土石製品・瓦・土製品・金属製品・銭貨

6　まとめ

調査前の対象地はアスファルト舗装の駐車場であった。北側にはグランドがあり、造成時に削平を受け、調査区の南部にはその折りの盛土層が観察された。その層の下から江戸時代の層までは、東側で1.2mの盛土があった。この盛土は江戸時代の遺物に加え、ロームのブロックを多量に含む層であった。同様の土は井戸跡内まで入り込んでおり、盛土の形成と同時期にこの井戸が埋められたと判断される。盛土出土遺物中にはガラス製品が寡少であり、コバルトの染付けも皆無なので、明治初めにおこなわれた練兵場造成の時の堆積と判断できる。井戸内の堆積状況からも一気に埋め戻されたことがうかがえる。江戸時代の層は最上面が現地表から1.6mで、ほぼ平坦に整地されていた。出土した遺物は上層のものと同様で、造成が周辺の地域を削ってなされたことが想定できる。旧表土中に硬化面が何層かあったが、これは度々整地が行われていたことを示すものであろう。

出土した遺物は江戸時代後半の遺物が主で約1,200点であった。ごく限られた面積の調査である上、出土遺物は半数は練兵場造成時の盛土からの出土であって、必ずしも屋敷地の営まれた時期や性格を反映しているとはいえない。ただ結果としては、盛土中と旧表土中の遺物に大きな差はなかった。

近世土器類の出土比率は表3・4のとおりである。土器類では碗類に染付けの磁器の比率(76.2%）が高く、かつ胎土の白い高級なものが多かった。前年度調査された佐倉町屋の弥勒東台遺跡（第1図）での組成とは異なっていた。弥勒東台遺跡は厳密にいえば寺院跡であり、陶器の比率が割合高く(44.0%)、染付けも色のくすんだものが目立っていた。今回の結果は調査地が上級武士の屋敷地という性格を示すものであろう。またカワラケ・灯明具・皿類の出土が少ない点では共通していた。北側の中学校での調査でのカワラケの多さとは、大きく異なる。また陶器の大形の鉢類、火鉢や水鉢が目に付く(31.9%)。なかには穴が開けられ、植木鉢として転用されたものもみうけられた。それらを考え合わせると今回の調査地は居住区域というより、庭としての色彩が濃い場所であったといえよう。

また「小勘定」の墨書をもつ土瓶の蓋が出土している。「小勘定」は佐倉藩の職制の内にあるが、小役人である。なぜこのような墨書が上級武家屋敷地で出土したのかも興味を引くところである。

特殊な遺物としてはガンフリントと思われる石器が出土していることがあげられる。フリントロック式の銃器は17世紀に考案され、1700年頃には主流になったもので、つい最近でもアフリカのザンビアではガンフリントが製作されていたという。日本では鎖国をしていたためフリントロック式の銃器は普及の機会を失っている。歴代藩主のなかで堀田正睦は天保の藩政改革を行い、文武を奨励し成徳書院をつくるなど、開明的であった。西欧兵学の研究も熱心であり、成徳書院の演舞場に兵学所を設けて研究を行い、近代的な銃器を採用している。従って何らかの理由で、例えば研究の一環として、フリントロック式銃器が持ち込まれていた可能性も考えられる。

佐倉市内はもとより県内の近世市街地遺跡の調査はまだ緒についたところである。従来、城内だけが注目されていたが、比較資料を得るためにも町屋の調査例が増加することが望まれる。

表１　出土陶磁器・土器一覧表

挿図	番号	遺構	遺物番号	種別		器種	生産地	年代	口径	器高	底径	胎土	残存度	特徴
6	1	2T	1,2	磁器	碗類	小碗	肥前	18C前	8.0	4.7	3.3	灰白色	1／2	釉白濁、桐葉文・見込みに花文(蒟蒻判)
	2	2T	2	磁器	碗類	小碗	肥前	18C前	8.3	4.6	3.2	灰白色	2／3	釉白濁、菊花文(蒟蒻判)
	3	不明	不明	磁器	碗類	碗	肥前	18C後			3.8	明灰白色	破片	網目文、見込み・台裏にも文様
	4	2T	2	磁器	碗類	碗	肥前	18C前			4.3	白色	1／4	樹木文、輪剝げ
	5	1T-01	2	磁器	碗類	中碗	肥前	18C末～19C前	10.0	5.5	3.4	白色	1／3	市松文
	6	001	1,2,3,4,5	磁器	碗類	中碗	肥前	17C末～18C初	10.8	6.2	4.6	白色	2／3	樹木文
	7	1T-02	1,3	磁器	碗類	大碗	肥前	18C後	15.4	7.8	6.4	白色	1／2	花文、口縁内面、見込みにも施文
	8	1T-01	3	磁器	碗類	小碗	瀬戸	19C	8.5	4.3	3.3	白色	1／2	内外全面に雲・渦巻文
	9	一括	1	磁器	碗類	小碗	瀬戸	19CⅢ	8.6	4.9	3.4	白色	4／5	草・蝶文、見込み「壽」字
	10	1T-01	3,4	磁器	碗類	中碗	瀬戸	19CⅢ	9.2	5.2	3.7	白色	2／3	花・蝶文、見込にも文様
	11	1T-01	8	磁器	碗類	中碗	瀬戸	19CⅡ	9.6	4.8	3.9	白色	1／3	葉・草文、見込に草文
	12	1T-01	6	磁器	碗類	小碗	瀬戸	19CⅢ	8.4	4.0	3.4	白色	完形	大葉文、見込にも文様
	13	2T	2	磁器	碗類	中碗	瀬戸	19CⅢ	9.8	5.0	3.8	白色	1／2	花文、異形字、見込に「寿」字
	14	2T	3	磁器	碗類	薄手酒杯	瀬戸	19C	6.1	2.7	2.5	白色	3／4	松亀文様絵付け
	15	1T-01	3	磁器	碗類	小碗	肥前	18C？	6.4	3.0	2.7	明灰白色	2／5	草文、鉄分付着、紅猪口の可能性も
	16	1T-01,2T	3	磁器	碗類	小碗	瀬戸	19C	6.2	4.6	3.1	白色	1／2	高高台、庭文様
	17	一括	1	磁器	碗類	小碗	瀬戸	19C	6.6	4.7	3.3	白色	完形	庭文様、反対面に雲月文
	18	2T	2	磁器	碗類	小碗	肥前	19C前	7.0	5.2	3.4	灰白色	1／2	唐草様文
	19	1T-01	9	磁器	碗類	小碗	瀬戸	19CⅡ	7.4	6.0	3.9	白色	2／3	木枝文
	20	1T-01	10	磁器	碗類	小碗	肥前	19C？			4.2	白色	2／5	筒形茶碗、網目文、見込みに蒟蒻判様の文様
	21	一括	1	磁器	碗類	小碗	肥前	17C末～18C初	6.2			灰白色	破片	端反、染付なし
	22	1T-02	3	磁器	碗類	小碗	肥前	17C末～18C初			3.8	灰白色	破片	端反、染付なし
	23	2T	2	磁器	碗類	小碗	瀬戸	19C	7.6	4.1	3.4	明灰白色	1／3	型押文、青味かかった釉、染付なし
	24	1T-01	7	磁器	蓋類	碗蓋	肥前	19C？	8.4	2.8	4.1	白色	ほぼ完	書斎？の様子の文様(本、衝立、座卓、硯、筆立て、筆等)、木の葉文、見込に梅木文
	25	一括	2	磁器	蓋類	碗蓋	瀬戸	19C	9.6	2.5	3.8	白色	2／3	木の葉文・唐草文、見込に変形文字文
	26	一括	2	磁器	蓋類	碗蓋	瀬戸	19CⅢ	9.2	2.8	3.5	白色	ほぼ完	菊花の連続文？、内面に沈線を併せた染付・見込みにも文様
	27	一括	1	磁器	蓋類	碗蓋	瀬戸	19C	9.2	3.8	2.7	白色	3／4	三分割区画内に松・竹・梅文様、紐部に文字文、見込みに竹葉文
	28	2T	2	磁器	鉢類	中鉢	肥前	18C末～19C前	19.0	8.4	7.8	白色	1／5	六角鉢、焼継痕、外面木の葉様文、内面は区画を区切り、扇？と花・藤？の葉文様、見込にも文様
	29	001	8	磁器	皿類	小皿	肥前	17C末～18C前	9.6	2.3	5.6	白色	1／2	青磁釉
	30	一括	2	磁器	皿類	小皿	肥前	19C前			8.2	白色	2／3	青磁菊花皿、器面ひび、焼継、底裏に「ヤ」の焼継マーク
	31	1T-01	3	磁器	皿類	小皿	肥前	19C前	10.0	2.3	5.5	白色	ほぼ完	折縁皿、縁錆、見込に風景文
	32	2T	1,2	磁器	皿類	五寸皿	肥前	17C前	13.9	3.3	5.8	白色	2／3	蓮花皿、見込に草花文
7	33	002、2T	1,2	陶器	碗類	小碗	京焼系	18C後	8.5	5.1	3.5	明灰褐色	2／3	端反形、外面鉄釉、内面灰釉
	34	2T	3	陶器	碗類	中碗	唐津	17C前			5.0	暗灰褐色	1／3	天目碗、黒色釉
	35	一括	1	陶器	碗類	中碗	唐津	17C前～18C後			4.8	明褐色	2／3	透明釉
	36	002	1	磁器	碗類	小碗	相馬				3.8	灰褐色	1／3	透明釉
	37	2T	2	陶器	碗類	仏飯器	瀬戸・美濃	19C			4.0	明灰褐色	台部	透明釉
	38	2T	3	陶器	鍋類	土鍋	京焼系		6.2	3.5	2.4	暗褐色	1／3	ミニチュア、鉄釉
	39	002	1	陶器	皿類	灯明皿	美濃	18C後	7.1	1.4	3.3		完形	灯明具、鉄錆釉
	40	002	1	陶器	皿類	灯明皿	信楽系		8.8	2.0	3.0	明灰褐色	1／2	灯明具、透明釉、スス付着
	41	2T	2	陶器	器台類	灯明受皿	美濃	18C後	10.1	2.2	4.0	明灰褐色	1／3	灯明具
	42	1T-01	3	陶器	燭類	燭	在地	19C前	5.0	1.9	2.5	褐色	完形	灯明具、タンコロ、スス付着
	43	002	1	陶器	燭類	燭	信楽系				6.0	明灰褐色	3／4	灯明具、透明釉、切り欠きあり、スス付着
	44	1T-01,2T	3	陶器	鉢類	大鉢	唐津				13.7	褐色	破片	三島手
	45	2T	2	陶器	皿類	中皿	瀬戸・美濃	17C後	25.8	3.7	15.4	灰褐色	1／4	鉄釉掛け分け
	46	1T-01	3	陶器	蓋類	急須蓋	不明		7.6	2.4	3.0	褐色	完形	下地白色釉、絵付け有、紐部が獅子を象る
	47	002	1	陶器	蓋類	土瓶蓋	京焼系		8.2	1.9	3.2	乳褐色	3／4	透明釉
	48	2T	2	陶器	蓋類	土瓶蓋	美濃	19C前	7.7		5.7	乳褐色	ほぼ完	鉄錆釉、櫛歯円文、紐欠損、「丸傳」刻印
	49	2T	2	陶器	蓋類	土瓶蓋	美濃	19C前	9.7	2.5	7.4	乳褐色	完形	鉄錆釉、櫛歯円文、「小勘定」墨書、「チタ西治」刻印
	50	1T-01	3	陶器	蓋類	急須蓋	不明		5.4		3.0	暗灰色	完形	下地白色、花木幾何文絵付け
	51	1T-01	3	陶器	鉢類	火入れ	京焼	18C後～19C前	5.4	8.4	6.3	明灰褐色	ほぼ完	灰釉、菊・花文絵付け
	52	002	1,2	陶器	鉢類	擂鉢	堺	18C後～19C	36.2	14.4	16.0	赤褐色	2／3	鉄錆釉
8	53	002	1,2	陶器	鉢類	火鉢	瀬戸	18C後～19C前			18.0	乳褐色	1／3	ルス瓶掛、緑釉流把手付、有孔、植木鉢転用
	54	一括	1	陶器	鉢類	火鉢	瀬戸	18C後～19C前			20.4	乳褐色	1／4	ルス瓶掛、鉄錆釉、トチン痕、三足
	55	1T-01,2T,002	2,3,1,2	陶器	鉢類	水鉢	瀬戸	19C中	28.8	14.5	18.5	乳褐色	1／2	灰釉、沈線文
	56	002	1	陶器	鉢類	水鉢	瀬戸	19C中	22.2	15.7	13.3	乳褐色	3／4	灰釉、沈線文
	57	002	1	陶器	鉢類	手水鉢	瀬戸	18C後～19C中			12.9	乳褐色	1／3	礫貼り、灰釉地白濁釉掛流し、底部穿孔
	58	2T	2	陶器	鉢類	植木鉢	瀬戸				19.4	乳褐色	破片	銅緑釉、浮文
	59	一括	1	陶器	鉢類	植木鉢	瀬戸	18C後～19C前				乳褐色	破片	鉄釉
9	60	1T-01	3	土器	皿類	かわらけ			11.8	2.2	6.6	暗褐色		糸切底、スス付着
	61	1T-02	3	土器	皿類	かわらけ		17C末	10.2	1.8	5.3	灰褐色	2／3	精製カワラケ、底部内外面に三星といわれる黒斑
	62	1T-02	4	土器	蓋類	塩焼壺蓋	泉湊	18C前	7.2	2.0	7.6	橙褐色	完形	内面に布圧痕
	63	002	2	土器	鉢類	火鉢		19C前			17.8	褐色	1／2	瓦質、内外面黒色、型押文、一部ミガキ
	64	1T-01	3	土器	鉢類	火鉢			38.2			暗褐色	破片	土師質、焼成やや不良、器面剝落、タガ・型押文有、口唇部摩滅
	65	1T-01	3	土器	鍋類	土鍋			35.6			明褐色	破片	内耳
	66	1T-01,1T-02,2T,002	12,4,2,1	土器	台類	敷輪		19C前	38.5	4.3	39.8	褐色	1／4	台下面煤ける
	67	一括	1	土器	鉢類	七輪			32.7			明褐色	破片	土師質、スス付着
	68	1T-01	3	土器	七輪部品	さな			9.4			明褐色	1／4	内面火熱、有孔
	69	2T	2	土器	七輪部品	五得			13.2	6.1	9.0	明褐色	2／3	内面火熱、内上部にえぐり

表2　出土石製品・瓦・土製品・金属製品・銭貨一覧表

番号	出土地点	遺物番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	材質	色調		調整・備考
70	一括	1	石製品	砥石	11.4	8.0	4.0	585	砂岩	青灰色	一部欠	表面・一側縁を使用
71	1T01	3	石製品	砥石	11.6	5.4	4.5	236	砂岩	青灰色	一部欠	両面使用
72	一括	1	石製品	砥石	14.5	4.6	5.8	310	砂岩	青灰色	破片	両面・一側縁使用
73	2T	2	石製品	砥石	10.7	2.7	2.8	94.6	砂岩	黒褐色	一部欠	両面・両側縁使用、二次被熱
74	2T	2	石製品	砥石	7.9	3.0	2.1	68.1	泥岩	乳白色	破片	表面使用
75	1T01	3	石製品	砥石	7.6	5.2	1.1	59.8	凝灰岩	淡灰色	ほぼ完	両面・一側縁使用
76	1T02	3	石製品	鋳型 内寸	8.0 5.9	3.2 1.5	2.5 0.4	120	砂岩	灰褐色	完形	内面被熱、湯口・湯逃げ孔・針金固定用溝あり
77	2T	2	石製品	鋳型	6.2	2.3	1.5	30.0	砂岩	灰褐色	一部欠	型の外枠部が磨られており、破損後の砥石転用も考えられる
78	2T	3	石製品	硯	7.5	2.5	0.6	18.5	緑泥片岩	暗緑灰色	ほぼ完	
79	2T	2	瓦	軒丸瓦					瓦質	黒灰色	破片	
80	2T	2	瓦	軒丸瓦					土師質	褐色	破片	
81	一括	1	石製品	火打石	2.7	2.5	0.7	7.4	メノウ質	暗褐色	完形	一側縁中央部に使用痕
82	002	1	石製品	碁石	2.0	2.0	0.5	3.8	粘板岩	黒色	完形	
83	1T02	2	土製品	今戸人形	3.3	2.7	2.7	13.9	土師質	橙褐色	頭部	接合面で分割
84	2T	3	土製品	人形	4.5	4.2	2.8	24.2	土師質	褐色	部分	猿の相撲、釉がかかる
85	1T02	5	金属製品	切羽	3.2	1.0	2.2	10.8	銅		完形	
86	2T	2	金属製品	小束柄	9.3	1.3	0.6	20.7	銅		完形	文様の痕跡あり
87	002	1	金属製品	火箸	17.3	0.8	0.8	23.1	銅		完形	柄の部分に鋸歯文痕跡あり
88	2T	2	金属製品	キセル雁首	(7.4)	1.0	1.0	(6.6)	銅		火皿欠	
89	002	1	金属製品	キセル雁首	4.2	1.0	1.9	6.2	銅		完形	
90	一括	2	金属製品	キセル吸口	5.2	0.9	0.9	3.4	銅		完形	
91	2T	2	金属製品	キセル吸口	4.7	0.9	0.9	3.2	銅		完形	
92	2T	2	銭貨	一分銀	2.17	1.54	0.10	3.3	銀		完形	「一分銀」、「定常八銀座」
93	2T	2	銭貨	文久永寶	2.70	孔巾 0.62	0.11	2.3	銅		完形	草書、十一波

参考文献

1992　新宿区内藤町遺跡調査会　「東京都新宿区内藤町遺跡」－放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－第II冊＜遺物編＞

1996　印旛郡市文化財センター　「千葉県佐倉市佐倉城跡」－市立佐倉中学校給食室建設に伴う埋蔵文化財調査－　財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書　第113集

1985　熊田宋次郎　「佐倉史談」国書刊行会

1986　国立歴史民俗博物館　「佐倉城の武家屋敷は語る」－歴博研究棟敷地の調査から－

1997　千葉県文化財センター　「佐倉市弥勒東台遺跡」－千葉地裁家庭裁判所佐倉支部埋蔵文化財調査報告書－千葉県文化財調査報告書第299集

1979　新佐倉真佐子を作る会「新佐倉真佐子」佐倉お茶の間風土記

1986　Torrence, R. Production and exchange of stone tools, Cambridge University Press.

表３　出土土器類比率グラフ

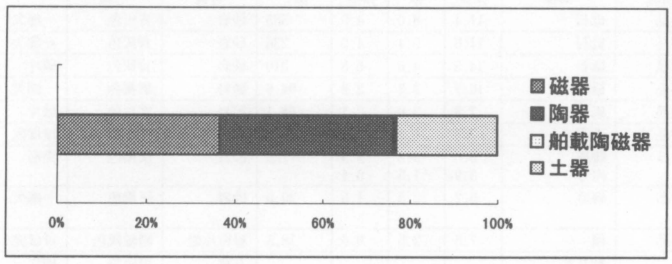
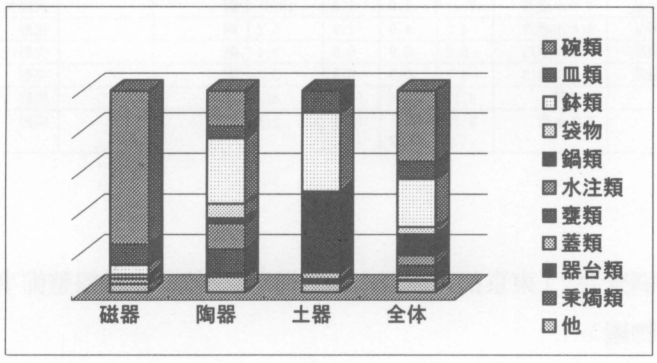


表４　出土土器類　器類別比率グラフ



	磁器	陶器	土器	全体
碗類	76.2%	17.8%		35.1%
皿類	10.1%	5.9%	11.1%	8.5%
鉢類	5.0%	31.9%	38.9%	23.7%
袋物	2.0%	7.3%		3.6%
鍋類		2.5%	40.2%	10.4%
水注類		13.0%		5.2%
甕類		11.8%		4.7%
蓋類	2.7%	1.4%	3.1%	2.3%
器台類		0.2%	2.4%	0.6%
秉燭類		0.5%		0.4%
他	4.0%	7.7%	4.3%	5.5%

写 真 図 版

佐倉城跡航空写真（縮尺約 1／10,000）

図版 2

調査区遠景

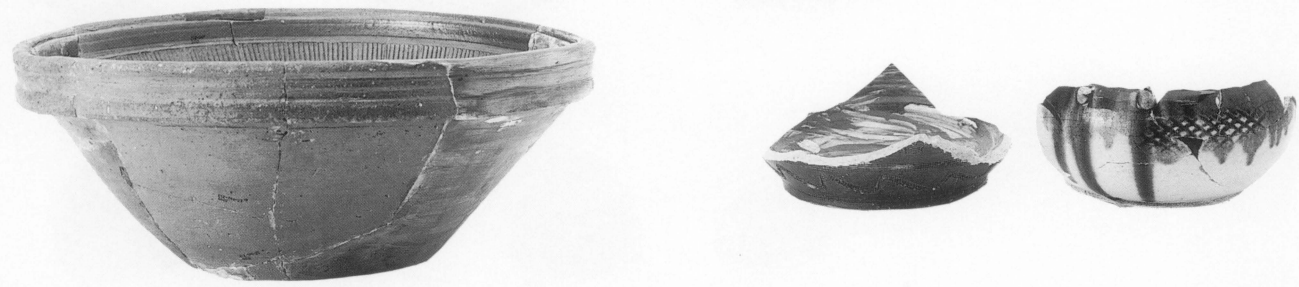
遺物出土状況

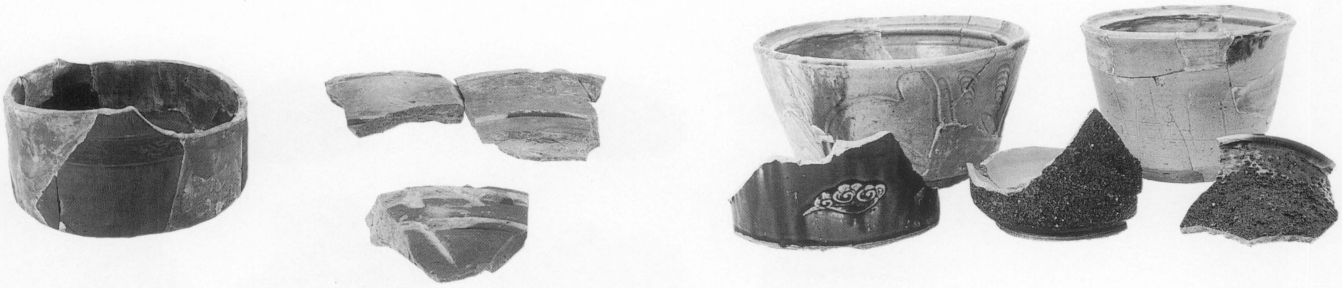
002号跡全景

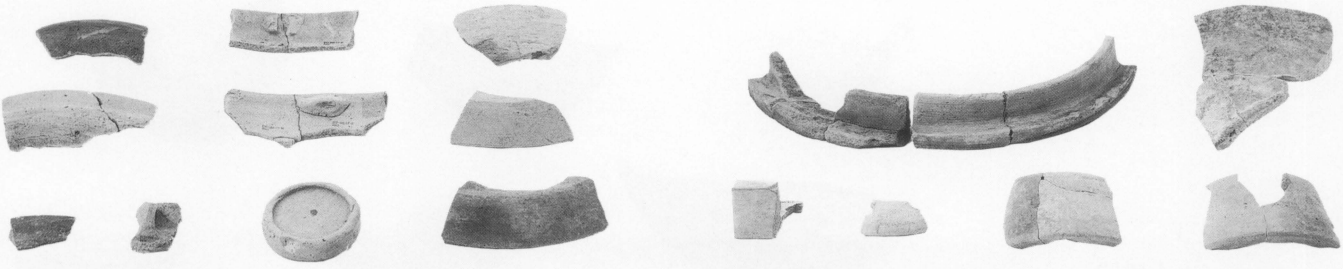
出土磁器
出土陶器（1）

図版 4

出土陶器（2）
出土土器







出土石製品・土製品・瓦・金属製品・銭貨

報告書抄録

ふりがな	さくらしさくらじょうあと
書名	佐倉市佐倉城跡
副書名	県立佐倉東高等学校部室建設に伴う埋蔵文化財調査
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第327集
編著者名	宮　重行
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809　Tel043-422-8811
発行年月日	西暦1998年3月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
佐倉城跡（さくらじょうあと）	千葉県佐倉市城内町（ちばけんさくらしじょうないちょう）	212	040	35度42分55秒	140度13分25秒	19870404～19870421	50	部室建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐倉城跡	城跡	近世	井戸跡　1基 土坑　4基 焼土跡　4基	土師器 陶器、磁器 カワラケ、土鍋 土製品、瓦 砥石、鋳型 金属製品、銭貨	佐倉藩上級武士の屋敷跡の一部が検出された。

千葉県文化財センター調査報告第327集

佐倉市佐倉城跡

千葉県立佐倉東高等学校部室建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成10年3月31日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　千葉県教育庁管理部

千葉市中央区中央4-13-28

財団法人　千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印　　刷　　株式会社　エリート印刷

千葉県中央区市場町6-8